Title	イギリスの対フィンランド宣戦問題(1941年) - 英ソ同盟の最初の試金石としての -
Author(s)	秋野,豊
Citation	北大法学論集, 34(3-4), 1-25
Issue Date	1984-03-09
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/16439
Туре	bulletin (article)
File Information	34(3-4)_p1-25.pdf



Instructions for use

イギリスの対フィンランド宣戦問題(一九四一年)

――英ソ同盟の最初の試金石としての――

秋野

豊

軍側は西方のドイツ軍に対して防戦を行ないつつ、フィンランド方面からのレニングラードへの脅威に対しては先制的 二六日のことである。こうしてフィンランドは対ソ戦争に突入したのである。(し 体制の陥落とを期していたフィンランドは、このソ連の行動を好機と捉えただちにソ連に対する宣戦を発した。 の空爆は本格的な規模のものであった。 な行動にでた。これはソ連の対フィンランド攻撃という形をとったが、とくに六月二五日の赤軍のフィンランド領 ランド北部に駐留していたドイツ軍部隊も南下の様相を示し、 九四一年六月二二日早朝ドイツはソ連攻撃を開始し、ソ連西部国境はただちに独ソ戦の舞台と化した。 一方前年のソ連・フィンランド戦争における失地の回復とソ連ボリシェ ソ連北部国境にも脅威が出現しつつあった。 迎え撃つ赤 またフィン 翌六月 ヴ 1 土

さてフランスの降伏以来約一年におよぶ単独の対独抗戦を維持してきたイギリスにとって、

独ソ戦の勃発は歓迎すべ

助を受ける」との原則を明らかにし、対ソ援助を声明した。 きものであった。二二日当日イギリス首相チャーチルはラジオ演説の中で「ナチ世界と戦り者ならびに国家は我々 同時にチャーチルは「ヒトラーとともに歩む者ならびに国 の援

論 希望するに至る。 政府になんらかの対フィンランド対策を講ずるよう要求しなかった。しかし九月に入りソ連が軍事的苦境に立たされる 家は我々の敵と見なされる」との原則をも明らかにした。しかしフィンランドが二六日以降「ヒトラーとともに歩」ん(2) だにもかかわらず、 ソ連政府はフィンランドの戦線離脱をもたらす効果を期待してイギリスのフィンランドに対する最後通牒の送付を イギリス政府はこれに対して消極的な対応を続けたが、 イギリス政府は同国を「敵と見な」す具体的な行動を採りはしなかった。 ソ連政府の度重なる強硬な要求に屈して一二 ソ連政府もまたイギリス

月七日ついに対フィンランド戦争宣言を発する。

ance)」 への基礎となった一九四一年後半における英ソ同盟の性格ならびにその後の発展へこの問題がもたらした影響 対ソ援助方針の真偽を問う一種の試金石であったのである。 である。 チャーチルの第二原則に直接にかかわる問題であった。それが故に、宣戦を巡る英ソ交渉は極めて緊張に満ちていたの 側にとって、「ヒトラーとともに歩む国家」フィンランドに対するイギリス政府の姿勢は、「敵の味方は敵」であるとする 振り返って見れば、 さらに述べるなら、 この問題は三ヶ月という比較的短期間にソ連側の意向に沿った形で解決されている。 イギリスの宣戦如何は 「敵の敵は味方」であるとする第一原則から導かれたイギリスの この意味で、宣戦問題は英米ソの「大同盟 (Grand Alli-か しソ連

第四巻は「イギリスがフィンランド、 限り存在しない。 であるにもかかわらず、イギリスの対フィンランド宣戦をめぐる英ソ関係を中心テーマに定めた論文の類いは管見の ソ連の史書もこの問題には多くの紙面を割いていず、たとえば『外交史 Hcmopus dun.ao.wamnŭ』 ハンガリー、 ル 1 マニアに対して戦争宣言を発するにあたり、引き延しを行な

を採る上で重要と思われる。

フ

1

ランド

'n

北方か

らの軍事的圧力は、

西方からのドイツ軍の大規模な攻撃に全力をもって防戦

しなければ

ts

らな

く要求したこと、 ていった事実を明確にしてはいない。 著はこの問題にかんしてこのように寡黙であるばかりではなく、苦戦中のソ連がイギリス政府に対三ケ国への 史 История второй мировой войны』の第四巻も同様に、 たことは留意に値する。 はすでに秋段階にイギリス政府に対して、 ヒトラ ĺ 連政府のこの立場はイギリスの一部の政治家だけではなく、 同盟に属する国家の重要な義務の一つは、 ・ドイツの同盟国に対して宣戦を行なったのである。」と記述しているのみであり、 またイギリスの宣戦の遅延に対してソ連政府が憤慨し、 ソ連政府がしかるべき申し入れを行なった後の一二月六日になって、イギリス政府はようやく 対ルーマニア・ハ ヒトラー・ドイツの衛星国との関係を絶つことであった。 ンガリ 次の一パラグラフの記述にとどめているにすぎない。] • 広汎な英世 フ イギリスの同盟精神に対する不信 ィンランド宣戦を行なら必要性を提起した。 に論からの理解をえた。 また 『第二次大戦 の念を強め ソ連政 宣戦を強 これら両 一反 府

本 リスの対フィンランド宣戦に至るまでの英ソ交渉を、 論文では、 英国公文書館(Public Record Office) 所蔵の内閣関係文書 主にイギリス側から辿ることにする。 (CAB) 外務省文書 (FO) に依拠して、

書簡 かったソ連にとって、 休戦交渉を行なう意思のあることを明らかにし、 を送り、 その 中で一九四〇年にソ連がフ 時の経過とともに由々し 1 ン いものとなっていった。 フ ランド ィンランドを戦線離脱させるための仲介の労をとるよう合衆国政府 から獲得した一 このためスター 部領土の返還を条件 IJ シは にソ連 八月四 は 日 フ 才 ン 1 ラン ・ズベ ١, トに ځ 0

論

求しているとは考えず、

加えて彼らがソ連体制の早期陥落を確実視していたこともあって、同政府はこれを放置したま

知っている」という回避的言辞をもって返答したのである。このためフィンランド政府は合衆国政府が正式の回答を要(⑤ 役割の性格にかんして説明を求めたのに対して、ウェルズは「合衆国政府はソ連がそのような希望を持っていることを ウェルズ(Sumner Welles)は駐米フィンランド大使にソ連側の意向を伝えた。その際ウェルズは合衆国政府が仲介 に依頼した。しかし合衆国政府がこのソ連側の依頼を実行に移したのはそれから二週間後のことであった。このことは(も) の役割を積極的に果す意思のないことをフィンランド大使に印象づけようと務めている。 |政府がソ-フィン間の調停工作に意欲を欠いていたことをまず間接的に示している。 さて、 その八月一七日国務次官 フィンランド大使が合衆国の

戦能力を占うと見なされたキエフ攻防戦は赤軍にきわめて不利な展開をみせていた。 ンド軍の南下は勢いを増し、レニングラードに対するその脅威は高まった。さらにその頃、 このように合衆国を仲介しての政治的な働きかけの失敗が明らかとになった八月末から九月初旬にかけて、フィンラ 東部戦線における赤軍の抗

需物資の供給を同時にそして正式に要求するならば、前者を拒否せざるをえないイギリス政府はその代償として後者、 決定した。ここからマイスキーは、イギリス政府は第二戦線開設に代表される軍事援助行動を実行する意思を有しては 数日後には、「赤軍への贈り物」としてハリケーン (Hurricane) 対英不信が芽生えつつある旨を英外相に強く訴えた。イーデンはマイスキーの言葉に苦悩の表情を露わにした。さらに 八月の末、 いないが、対ソ援助公約の不履行には精神的な負い目を感じており、したがってソ連政府が第二戦線の開設と武器・軍 祖国のこのような逆境を遠くイギリスにて座視せざるをえなかったソ連駐英大使マイスキー 独自の判断でイーデンに会談を申し入れ、イギリスは対ソ援助公約を履行していず、このためソ連政府内に 戦闘機二百機を供給することをイギリス政府は急遽 (Маискии, Иван) は

れてのことであった。

さて九月六日チャーチル

はスターリン宛ての返書を認め、

まず第二戦線の開設は物理的に不可能であるとの見解を示

もしくはその証拠が残ることを恐

すことを求めたのであった。ところでこの要求が口頭でなされた理由は後に明らかにされるように、(st) ワに送った。 ける能力を長期間にわたり喪失することでありましょう」が付け加えられていた。マイスキーはスターリンからの私信 すなわち大規模の援助物資供給に必ずや応ずるとの結論を引きだした。 の攻撃に苦しめられたソ連がイギリスにこの種の要請を行なったことが漏洩したり、 合、イギリス政府は同国に戦争宣言を発する旨の通知を行ない、これをもってフィンランドの対ソ戦線からの離脱を促 を手渡した後、 スキーの進言通りの二要求が盛り込まれ、 たして九月四日スターリンのチャーチル宛て書簡と指令とがマイスキーの許に届けられた。その親書の中にはマイ ソ連はたんに敗北するか、もしくは反ヒトラー主義戦線における積極的軍事行動を通じて連合国側を助 指令に基づき口頭にて第三の要求を行なっている。すなわち、 さらにそのインパクトを強めるための以下の文章、「これら 二種の要求が マイスキーはこの結論に基づく報告書をモ フィンランドが対ソ侵略を中止しな 小国フィンランド スク い場

た 境(一九四○年以前の)を越えて南下した場合、 をえたものであることが判明した。そしてフィンランド問題についてチャーチルは、「フィンランド軍がソーフィン旧国 と返答した。さて、 ただちに宣戦にかんするチャーチルの言葉を「是非とも実行に移すよう希望する」と英大使に表明した。クリップスは(ヒン) 次いで武器等の供給についてはスターリンの要求を満たす用意のあることを明らかにした。マイスキーの進言は的 合衆国政府に対してもこれに沿う形での外交的圧力をフィンランド政府に加えるよう依頼する所存であります。」 スターリンはこの返書をクリップス (Cripps, Sir Stafford) 英駐ソ大使から手渡され一読した後、 英政府はフィンランドに戦争宣言を発するとの警告を行ないます。 ŧ

論

非常に親フィンランド的であり、 によりフィンランド船舶の利用が不可能となり、その結果イギリスの海上輸送力が削減されること、②合衆国の世論は 行なわない限り対フィンランド宜戦は控えられるべきであるとの見解を示している。そしてその根拠は、 する宣戦問題」と題される覚え書を作成し、 スター リンのこの発言を本省に伝え、 これに基づいて本省はただちに 「フィンランド、 ルーマニア、 その反発を招くこと、③フィンランドを枢軸陣営に決定的に押しやること、 閣僚に配布した。外務省はその中で、ソ連側がこの要求を再び強硬 ハンガリー (1) 宣戦 (4) フィ な形で の布告 に対

ら直 跡が見受けられるのである。 ランド政府に伝達するとの決定を下した。ここに一定の対ソ譲歩はなされた。 後の講和時においてもフィンランドを公敵と見なさざるをえなくなろう」との警告をノルウェ もとに討議を行なった結果、「フィンランドがソ連に対する侵略行為を中止しない場合、 ランド国内の親イギリス勢力の立場を掘り崩すこと、の諸点に求められた。九月一五日の第九三回閣議はこの覚え書を(3) してさらにフィンランド側からの回答の期限も賦されていなかったことは留意されなければならない。巧妙な値切りの |截的な用語は使われていないこと、さらに 「ソ-フィン旧国境を越えて」 という条件も付けられていないこと、そ しかし、 この警告には イギリスは戦中のみならず戦 ー政府を仲介してフィン 「戦争宣言」とい

求に対する明確な返答を回避せざるをえなかった。このような対応がイギリスの対ソ同盟精神に対する疑惑をソ連側に(゚ピ) よう要求した。スターリンがはたしてこの要求の現実性を信じていたかいなかは明らかではない。 実施不可能との見解を明らかにした第二戦線開設の代案として、二五から三○師団の規模の援軍をソ連領内に派遣する フ陥落がほぼ明らかとなった九月一三日、 その困 の中で、 難の伴わない今回の援軍派遣要求はチャーチルを苦しい立場に追い込んだ。 敵占領下の海岸に上陸することの困難性をもって第二戦線開設が不可能であることの根拠としてい スターリンは再びチャーチルに宛てて私信を送り、 事実、 ただチャーチルは前 チ 前回 ャ チ チ † | ルはこの ルが

三ヶ国

を巡る戦後

処理

問

題

は密接

に関係してい

たので

ある。

との す様 が妥結の様相を示した時点で、 側にとって、 そのアカデミ ッ なくさ のである。 K ッ 給を受ける以前に軍事 連側を精神的 協定を締結するため ぉ ク ヮにおける英米ソ三国協議の開催された九月末から一○月初旬の東部戦線はいつの瞬間 に 相 いて武器 できた最大限 に提案した。(8) (Lord Beaverbrook) れただけではなく、 を呈してい これ ひ 協定の成立は意義深いものであった。 に鼓舞し、 ッ ţ, をイギ T ク性が英米代表団に寛大な供給を公約させた最大の要因であった。 物資供給問題にかかずりあうことなく、 これ の た。 は赤軍 武器、 0) ・リス 的 このような状況にあって 派 は具体的 に敗 造団 の抗 時的にソ連の抗戦を強化させる期待が持てただけでなく、最終的にはソ連が・・・・ ソ 側から見ると、 物資を供給するよう英米に義務づけたのであり、 連から をモ 戦 供給大臣の努力によって、 北する可能 に両 ス 士気を低下させることになるのではない ターリンは戦中のみならず戦後期をも含む英ソ間の政治条約 スクワに送り、 国間 の新たな種 性が強く存在して の 戦争 ソ 連が抗戦を継続する限りイギリス政府は大規模の 自 類 ッ 的 連に 供給公約を通じて瀕死のソ連に活を入れようと試みる。 の要求に遭遇することになるはずであっ 供給協定はソ連が抗戦を継続させる限り、 0 調整を意味していた。 対する武器供給協定交渉は多分にア 他の重要な問題に全精力を集中することをソ モスクワ協定は成立し、 いたからである。 かと憂慮し ともあれ、 後に述べるように、 このことはそれ以後の英との援助要求交渉 ソ連側を大いに刺激した。(汀) たイ 大規模の供給を謳う協定の ・ギリ 1 た。 ギ カ にもソ連体制の崩 Ź IJ デ () 武器(? はた 政府 ソ ス の締結をビ 側 対三ケ国戦争宣言と同 連側が現実的に望 ッ L 代表ビー ŋ は対ソ軍 連側 物資 て、 K 協定に基づく 眏 1 の ĸ ところが モ 9 可 ヴ 供 壊をも ス ヴ 事 給を余 能 方 成 物資 ァ クワ交渉 にした Ì 1 立 b ブ むこ ソ ブ Þ たら モ は 供 連 供 儀 ス 給

1 ・ツ軍 E ス の進撃が目撃されるまでに到った。 ŋ ワ交渉終了 か ら約 二週間 を経た一 ○月中旬、 一〇月一五日には公官庁関係を中心とする首都半疎開が開始され、 V = ン グラードはすでに包囲され、 首都 モ スクワ ታነ らは ۴ 肉 イ 眼 ッ軍 で

論 による防衛網突破に伴い残された市民の間に数度にわたるパニック状態が起るまでに到った。しかし、ドイツのモ(型) 間完全に停止させられた。一方この悪天候に乗じた赤軍は一〇月二〇日をさかいに全線で際立った抗戦力を発揮し、 ワ攻略までまさに一歩という時点に秋期の長雨が降り始め、 道という道は泥沼と化し、ドイツの誇る機甲部隊は一定期 スク 独

ソ戦の流れに転機の兆しが訪れた。この軍事的転機はソ連の対英外交に徴妙な変化を与えることになる。

た20 とともに、宣戦問題は政治的色彩を強めるに到るのである。 スキーはソ連の同盟国イギリスによるこの措置はソ連に対する連帯声明として受け取られるであろうとの意見を表明し は宣戦を発すべきである旨のモロトフ (Мологов, Вячеслав)ソ連外務人民委員のメッセージを伝えた。 この日のソ連外交の動きは数日後に本格的に開始されることになる対英外交攻勢の序曲であった。軍事展開の変化 ○月一七日マイスキー大使は外務省にイーデンを訪れ、 フィンランド、 ルーマニア、 ハンガリーに対してイギリス その際マイ

援助を今日まで行なっていず、そうである以上せめて政治的な面でソ連政府の要求に最大限応ずることはますますもっ に非常に大きな重要性を賦与していると宣し、 'n Ų る。 利益を損わせることは明白である。 かなる決定をみたかを質した。未決定のままである旨の説明をイーデンから受けたソ連大使は、ソ連政府はいまやこれ イーデンはこのモロトフのメッセージを二○日の第一○四回閣議で紹介した上で、「対三ケ国戦争宣言が イギリスの 決定は次回の閣議に預けられた。ところが翌一〇月二一日マイスキーは再びイーデンを訪れ、宜戦問題が閣議でい ただこれまでの経緯から、 ことフィンランドにかんしては、 合衆国政府との協議・協力が必要であろう。」と主張 外務省側の方針転換を明らかにした。 宣戦布告を行なっていただきたい。 是非とも」。この発言は外交官として最も緊急な場合にのみ許され しかしいまや我々はソ連に対する連帯の印しとしてこれを行ならべきであると考え 討議の結果イーデンはこれにかんするメモランダムを作成するよう求 次のように続けた。「イギリス政府は広汎な規模における実質的な対ソ

「非」に回答するのは必至であった。

1

スキ

1

は

イーデンを訪れ、

イギリス政府の方針決定如何

について再度質した。

1

ーデンのまたしても否定

て い る。 ② る類いのも の圧力を受けた外務省は二三日の第一〇五回閣議にて討議されるべきメモランダムを作成した。 のであった。 イーデン自身この日のマイスキーの行動を「外交交渉の場において可能な最大の圧力」と評し 務

グリ 諸国 イギ ts 省の見解は、 であると力説したが、チャーチルならびに労働党メンバーのアトリー(Clement Atlee)、ベビン(Arnest Bevin)、 あった。 によっていまや排除される」というものであった。(3) 'n ij ĺ の意見を求めるべきことが決められた。 についての最終的な結論はまたしてもみいだされず、 ス側の「是」 ンウッド ビーヴァーブル 「宣戦布告に反対するあらゆる議論はこの要求を拒絶し、 (Arther Greenwood) の判断を付すことなく、 ック は合衆国政府等に参考意見を求める際、 らはビーヴ 戦争宣言の是非をバランスシート形式で問えば、 ちなみに、 しかしこの見解は同閣議での主流の考えとはならず、 アル この閣議でイーデンを支持したのはビー ブ ただイギリス政府がとるべき方針にかんする合衆国、 ル ッ クの意見に反対し、 英政府が宣戦に傾いていることを明らかにすべき ソ連政府を失望させるべきではないという一点 彼の意見は受け入れられなかった。 あらゆる第三者的 ヴ アー そこにおける外 ブ N 結局宣戦 ッ ク 英連邦 理 のみで j) ·

民に示したいと希望しているのであり、 IJ 的な回答に接したマイスキー ス 軍 ソ 連政 は東部 府 は 戦 この 線において赤軍と手を携えて戦っていないばかりか、 事 態を国民に説明するすべを知らな は この問題がソ連政府にとってなぜかくも重要であるかを次のように説明した。 それが故に我々はイギリスのソ連へ ,, ソ 連政府は英ソ間 いかなる地点でもドイツ軍と戦 の連帯を象徴する対フィ に真の同盟関係 が存在 ンランド戦争宣言 闘を行なって していることを国 「イギ な

を是非とも必要としているのである」。さらにマイスキーは、「枢軸陣営はすでにフィンランド、

ルー

-7

ニア、

ハンガ

IJ

論

戦争目的にソ連を攻撃してきたが、いまやフィンランドは完全にドイツの同盟国となってモスクワを攻略中であり、 宜戦布告に踏み切ることを希望する旨語った。 務省に訪ね、「フィンランド軍はモスクワ戦線にも参加している」との情報を与え、この情報によってイギリス政府が たがってイギリス政府は「敵の味方は敵」の立場から同国に戦争宣言を行なうべきであるということであった。 ない」との見解を外相イーデンがマイスキーに伝えるべきことを決定した。さらに、同閣議は合衆国、(%) に宣戦の是非にかんする質問状の草案を承認し、早速打電がなされた。マイスキーは一○月の最終日にもイーデンを外 もたらす効果を著しいマイナスとみなしており、ソ連政府が強い圧力を我々に加えない限りこの問題を再考する用意は れたことを宣伝する演出効果を与えるとの危懼を示し、宣戦に絶対反対の意思表明を行なった。これに対してイーデン ルはマイスキーの後半の言葉を捉え、イギリスの戦争宣言はヒトラーを盟主とする一大連合がヨーロッパ大陸に形成さ ーを取り込んでいるのであり、 イギリスはソ連の要求をなんとしても満たすべきであると主張した。 イーデンは同日の第一○六回閣議にてこのマイスキー発言を報告し、宣戦の「是」を再び説いた。 イギリスの宣戦はこの事態になんらの変化をももたらさない。」 とたたみかけた。この(タミ) マイスキーが意味したことは、 しかし結局、閣議は「イギリス政府は宣戦の フィンランドはこれまで旧領土の回復を 英連邦諸国政府 しかしチャ Ţ

った。一〇月二九日イギリス大使ハリファックス(Lord Halifax)はハル国務長官(Cordell Hull)を訪れ、第一〇六(2) 大統領に詰め寄り、 は八月一七日に合衆国政府が仲介したソ連の講和提案に対してフィンランド側はいまだ公式の回答を行なって 在の合衆国公使はフィンランド大統領リュティ(Risto Ryti)に会見を求め、一〇月二七日にこれが許されるや同公使 ィンランドのソ連侵略を中止させる方向で独自に動き始める。 ソ連政府がイギリス政府に対フィンランド宣戦要求をつきつけていることを察知した合衆国政府 ソ連侵略を中止しない場合、 同国は合衆国との友好関係を失う可能性に直面しようとの示唆を行な 一〇月二五日の本省からの指令に基づき、 ヘルシンキ駐 な フ 月一日付け

のイギリスの主要各紙は

1

Ξ

1

ク発し

でソ連がイギリスの対フィンランド、

ル

İ

7

=

ン

る。

府が を得 回 IJ い は ፧ の会談を行ない、 閣 て言うならば宣戦は誤 明言を控えたものの、 ス ラン 議 スとの会談から認識したハルは翌三○日合衆国公使に再び打電を行ない、 側 ۲ ソ連政府の圧 新たな圧力を加えるよう指令した。 の決定に基づく打診を行なった。 メン の ۲, 動きを牽制しつつも、 に加加 トを避けようと努めつつも、 えている最中であることを告げた。(29) イギリスの対フィンランド宣戦問題にかんして求められていた合衆国政府 力に屈 私の判断するところではおそらく、 った方策と考えているように受けとれた。」と述べている。(タイ) して時期尚早の宣戦布告を行なわないよう腐心する。 フィンランドに対しては積極的な政策をさらに継続する。 これに対し 宣戦に反対の意向を仄めかした。 ハルはフィンランドに対しこのような圧力を直接加える一方で、 イギ ハルは合衆国政府がイギリス政府の希望する外交的圧力をまさにフ ij ス政府が戦争宣言を真剣に考慮中であることをこの 合衆国政府は宣戦に特に反対でも賛成でもなく、 ハリ · ファ ハル その中で直ちにリュ ッ は一〇月三一日 ハ ク スが ル はこのように微妙な形で 本省に宛てた電報 の回答を示した。 テ K ィ大統領へ ŋ Ź 1 ァ ギ は L ッ の ij IJ か ル ŋ え政 1 接 フ は ス بح ギ 強 ル I

ガ を示す情報が合衆国側から公けのものとされた。 にした。 に仄めかした。 غ 月三日記者会見を行ない、 リート の単独会見を得たが、 戦争宣言を要求していることを公表した。(②) このようにして、 この内容もちょうどこの頃公表された。(3) 小国 その際 ソ連側の依頼を受けて合衆国政府は八月にフィンランド フ 1 フィンランド大統領はフ ン ランド の侵略 またアメリカ人記者テイラー このことは宣戦問題をめぐる英ソ関係に暗雲を投げかけるこ と を阻止するためにソ連側が さらに並の外交圧力では効果が見込めないと判断 1 ンランドの 目 [的が ボリシェ い (H. J. Taylor) は一〇月三一日 ታነ に英米に依存せざるをえな に休戦提案を行なっ ビキ体制 の破壊にあることを したハ た旨を明ら か ル に た は テ ts か

論 であっ⁽³⁶⁾ 問題を再び閣議に諮りましょう。」と述べた。 同日このメッセージをイーデンから見せられたマイスキーは強い反発の(※) くば、 政府がいまや討議を望むのは一九四一年中の対ソ軍事援助ではもはやなく、 ンと意見を交換したが、 ンが宣戦はやはり最も重要であるとの結論を下した場合、 チルの返答は「このメッセージは同盟国間のものであり、 たす用意があるのか。」と質した。 答えに窮したイーデンはその場で電話機をとりチャーチルにこれを伝えた。 姿勢を示し、 うことに求めないでいただきたい。……しかしながらもし貴殿が宣戦を我々になお強く希望する場合、私は喜んでこの 宛てのメッセージの中でチャーチルは、宣戦布告が連合国側に利益をもたらさないとストレートに述べ、次いで「願わ ないことをスターリンに卒直に訴える親書を送りたい旨を提案し、 三日の第一〇八回閣議にて、宣戦の「是」を認める見解が少数であることを楯に強い反対意見を表明し、 「でアドバイスを避けるというものであり、宣戦に肯定的見解を示したオーストラリア政府を例外とする英連邦諸国 合衆国、 イギリス政府は自らの判断に基づいて決定すべしとの見解を寄せた。この結果に勇気づけられたチャーチル(タキ) 問題なのは、 宣戦のもたらす利益に我々が懐疑的である根拠を我々の側に熱意が欠如しているとか同志意識が希薄であるとい チャーチルの言葉はある種の譲歩を含んでいた。さらにこの日マイスキーは軍事協力問題についてもイー 英連邦諸国政府からの参考意見は一一月三日までに回収されたが、 「もし同志スターリンがこれに対する返書の中で宜戦を強く望んだ場合、 他の局面をも考慮に入れた上で、スターリンがいかなる程度の重要性をこれに賦与するかにある。」 彼の発言はすでにソ連外交に一大変化が生じたことを示していた。 我々が全力を尽くしてこれを満たすよう努力するのは当然で 我々は卒直な意見の交換を望んでいる。 承認された。こうして翌四日に送られたスターリ 前述のように合衆国政府のそれは微妙な 九四二年春の 攻撃についてなので イギリスは本当に彼の希望を満 マイスキーによれば、 考慮の末にス 宣戦が得策で タ チャー あ 1 は同 ソ っ 連 ij は

〝ソ連外交の変化を示す動きはさらに続いた。 赤軍創設記念日の前日の一一月六日にスターリンは演説を行 な

っ

た

P

英ソ同盟を象徴するといら政治的効果を越えた利益、

すなわちイギリスの宣戦をもって三ヶ国を英ソ共通の敵国

に

点にお が、 向上する。 K 《求していることをここで初めて公式に明らかにした。(※) それはソ連 いても第一 !の単独抗戦能力に対する自信に満ちあふれたものであった。 級のものであることを伝える情報がロ ンドンにもたらされた。 (39) 翌七日モスクワで行な スター わ ソ連の抗戦士気はこれを境い れた軍隊 リンは第二戦 の記 念パ 線の開設をイ V 1 ŀ, は . に著 ・ギリ *ት* ፡ なる え側

見を述べている。(4) 我々 断 前 宣戦如何は原則の問題であり、 ジの中で、 すためにでしょうか。」と述べ、イギリス政府に対する強い不満と怒りとを露わにした。 見解を示しました。 ています。 0 の 敗 は 〔絶を望んでいるのかと疑った程であった。 のものとは調子を異にしていた。 一月一一 戦を予測してい の期待をやぶる形で広く公けのものとなっております。 く希望する」 ス タ 英ソ間 我々はこの問題を特別の機密チャンネルを通じて貴殿に提起したにもかかわらず、 1 日マ IJ かいい 1 ここにはイギリスの対ソ同盟精神に対する不信が表明されている。 はこの段階で対独抗戦に自信を得ていただけでなく、 で戦争目的 いたことであり、(4) ・スキ なぜこのような事態が引き起こされたのでしょうか。 なか 1 は七日付けのスター については触れることなく、「対フィンランド宣戦問題にかんして、 **の** このことはマイスキーらの発言から明らかである。 致がなければ戦中のみならず戦後においても英ソの友好同盟関係は望みえない それは非常に非友好的なものであり、 とするならばイギリ さてこの親書の中でスターリンはイギリスの対フィンランド宣戦を改め ・リンか らの親書をチャー スの宣戦は三ケ国の対ソ侵略を中止させるという軍 それにとどまらず、イギリス政府は我々の 客観的か チ 英ソ間に連帯が欠如していることを世界に示 チ ル ヤ に手渡した。 ーチル いなかを問わず一 ただここで留意しなければならな たしかにソ連にとってイギリ は読了後スターリンが英ソ関 またスターリンはこのメッ このメ これにかんする全経緯 耐え難い事 ッ 九四二年 セ ī ジは 提案に否定的 態が生 明 中 事 ・
の
ド 6 的 لح カゝ 起 効果 K 1 ス の セ の 意 l 7 以 ì 15 は 0)

仕上げ、

論 ソ連政府がこれに興味を示すことはまずないであろうとの意見を明らかにした。これは当時ソ連の主眼点がフィンラン 月二〇日マイスキーにこのプランを伝えた。 ンランドの独立を保障することを条件に、フィンランドの戦線離脱を実現しようとするものであった。イー イーデンは、 るイギリスの対応はソ連の不信感をさらに強いものにしているとの圧力をイーデンに加え続けた。第一一 ていると述べ、このような誤解を解消するために戦争宣言を早急に行なうべきであると主張した。これに対してチャー 連側に通知された。 合には戦争宣言を行なうとの最後通牒を発すべきであると主張した。しかしイーデンはその場での賛成をえることはで ン側から何らかの和解を求めるメッセージを引きだすよう努力した。しかしその間も、 ーデン、ビーヴァーブルック、マイスキーの三人は英ソ関係の改善をもたらすために非公式の協議を行ない、 チルは依然ソ連体制の陥落を信じており、これがために彼の宣戦に対する反対は全く揺らぐことはなかった。 議でイーデンは、 連の対英不信を緩和する第一の方策として、宣戦布告を実行するよう努力を重ねる。まず一一月一一日の第一一一回閣 ギリス政府に承認させること、 決定はまたしても延期された。この時点で外務省はあるプランを作成する。それはイギリスとソ連が共同でフィ(4) スターリンの高飛車なメッセージに対してチャーチルは立腹し、返書を送る意図を失った。そしてその旨がソ これら三ヶ国にかんするソ連の懲罰的な戦争目的――とくにフィンランド、ルーマニアからの領土獲得 イギリスはまずフィンランドに侵略を中止するよう要求し、もし二週間以内に肯定的回答がえられない場 ソ連側はイギリスが宣戦を渋る理由をフィンランドと他の二ヶ国が資本主義国であるという点に求め 英ソ関係はここに最悪の段階を迎えた。これ以後イーデン、ビーヴァーブルックは今回示された をもたらすが故にスターリンにとってより重要となっていたと思われる。 しかしこれに対するマイスキーの対応は冷淡なものであった。 マイスキーは宣戦問題 四回閣議にて デンは一一 ソ連大使は にか その後イ スターリ んす

۴

の戦線離脱にはなく、

前述のように宣戦という法的措置そのものにあったとすれば蓋し当然の反応であった。マイス

を

できない。

翌二四日の第一一六回閣議において、イーデンはフィンランド、

ルーマニア、

ハ

ンガリーが防共協定に近く

丰 はこのプランの は宣戦問題がソ連を非常に苛立たせていることをまたしても伝えた。(48) 非現実性を悟り、 これをとり下げた。 マイスキーの消極的見解を目にしたイーデン

であ て訪 る際、 宣言を 認めるイーデンにとって、 不信を和らげるために」イーデンの訪ソはここにおいて不可欠であった。(4) ことを見逃すことはできない。 協した背景として、 ランド に、 傷つけられたかを たことを認め 関係は最悪の事態から脱することになる。 ス 自らの行為の正当性を前面にだした。 ソ前に ター 政府に発する用意のあることを伝えることになる。(49) イーデンとビーヴァーブルックの意見を求めた。その結果、翌二一日にスターリンに送られたメッ 「強く希望する」かいなかは述べられてはいなかった。さて、(行) .英ソ関係を紛糾させる要素を除去しておくこと、 イーデンとチャーチルとの間で、 ビ ト ンがイギリスの宣戦を「改めて」希望するならイギリス政府は た ヴ ι 「我国は汚辱を蒙らされ、 この書簡の中で彼が英ソの戦争目的を調整させる目的でイーデンを訪ソさせる申し入れを行な かしスターリンは、 ァーブルックが待ったスターリンからの和解的メッセージは二○日に届けられ、 訪ソ時の交渉の決裂は彼の政治的キャリアを傷つけることになるのは必至であり、 英ソ関係改善のために、 宣戦要求の全経緯が公表されたことによって彼自身ならびにソ連国民が ただ奇妙なことに今回のメッセージの中にも、 さてスターリンはその中で前回のメッセー 訪ソ受諾とフィンランドへの最後通牒とが裏取り引きされた可能性は否定 我同胞の意気は著しく阻喪させられたのである」 との言葉をもって説 より端的に言うなら「スターリンの心の中に巣くっている対英 チャーチルがこの段階でイーデン、 就中、 対フィンランド チャ しかし一方チャーチルの後継者を自他ともに ーチルは二〇日にスター 四 日の猶予期間 宣戦問題を解決しておくことが ジの調子が穏当なものでは スターリンがイギリス ビーヴ つきの最後通牒をフ ij アリ これを境 ン への返書を認め ブル セージはつい したが ッ に英ソ の *ts* 必要 った 戦 *ነ*ነ 争 眀 K っ

意見に押し切られ、

イーデンの努力はまたしても稔らなかった。(ラエ)

調印するとの情報を提供し、イギリス政府が宣戦をためらう理由はもはや存在しないとの主張を行なった。しかし、二 のチャーチルの親書に対する返書の中でスターリンが正式に宣戦を希望するまで英政府は行動を控えるべきだとの

ド政府への最後通牒の伝達を依頼した。翌二七日朝これに基づきハリファックスはウェルズ次官にイギリス政府 ィンランド最後通牒を届け、その伝達を依頼した。期限は一二月三日となっていた。これは翌一一月二八日駐フィンラ(S) これを受けとったイギリス政府はついにハリファックスに指令を送りその中で、合衆国政府にイギリスの対フィンラン はたして二三日スターリンは返書を送り、その中で正式にイギリスの対フィンランド戦争宣言を要求した。(※) 二五日に の対フ

という私の見解は変っていず、私はいまだにフィンランドは撤兵するのではないかという希望を捨て切ってはいない。」 親書を送った時点から起算して二週間後にあたる。今夜私はマンネルハイム(Mannerheim, Baron Carl Gustaf)に 明確になるまでこの措置は留保されるべきと考える。さらに言えば三日は尚早に過ぎる。五日こそが私がスターリンに 議にて、チャーチルは戦争宣言のなされるべき日付は一二月三日ではなく五日でなければならないと主張を行なった。(%) ンド合衆国公使を通じて、フィンランド政府に伝えられた。(Si) 親書を送る。我々は彼がこれに対する返答に要する時間を見る必要がある。 ることを当然と考えているように思われる。私としては、フィンランドが我々の最後通牒にどのような対応を示すかが 翌一一月二八日チャーチルはイーデンにメモランダムを送り、「貴殿は三ヶ国に対する 戦争宣言が一二月三日に発され ところがチャーチルはことこの段階に到り、宣戦布告に対する抵抗をさらに示す。まず一一月二七日の第一二〇回閣 宣戦布告という措置は賢明なものではな

て深い悲しみを抱いております。すなわち、我々は同盟国ソ連への忠誠心から数日中にフィンランドに対して戦争宣言

と主張した。そして同夜チャーチ

ルはマンネル

ハイム・フィンランド軍総指令官に「私は今から起こりうることに対し

であった。

送った。 た。 ドが を行なわねばならないということに対してであります。……フィンランドを友とする我々の多くにとって、 の純粋に個 んして貫殿と楽しく語り合い、 (あの罪深き敗北国ナチスドイツと同席にて戦争責任を問われることほど悲痛なことはありません)。 .人的で私的なメッセージを送らざるをえないという気分になったのであります。」という切々とした書 文通したことを思い浮かべましたところ、手遅れにならぬうちに貴殿の考慮を促すため 第一 次 フ 大戦 を 办。

の陥落を運命視している。」ことをイーデンに語っている。(w) 府を介して、イギリス政府は一二月五日まで戦争宣言を控える用意があるとの意向を伝えられた。(8) 宛てた手紙に示された親フィンランド的姿勢と、 ガン (Cadogan, Sir Alexander) 外務次官の日記によれば、 け入れたイーデンはこの旨の指令をハリファックスに再び送り、 対フィンランド宣戦布告の最終期限を一二月三日から五日まで引き延ばすことを強く主張したチャーチル 彼の六月二二日の対ソ援助声明とは裏腹の消極的な対ソ姿勢との チ Ŧ ビーヴァーブルックは「チャーチルがいまだにソ連体制 一一月二九日フィンランド政府はまたしても合衆国 ĺ チ 'n の宣戦問題にかんする態度はマンネル 一一月二八日のカド の意見を受 1

れを行なうのは実に耐えがたい。 ランド政府が向う二週間に依然戦争行為を中止せず、また貴殿が改めてこれを希望されるなら……』と述べている。 フィンランドを離脱させることのできるチャンスがいまだに存在するにもかかわらず、 モランダムを送りつけ、 こうしてデッドラインを強引に引き延ばしただけではなく、 対フィンランド宣戦布告をさらに延期しようと努めた。 御承知のように一一月二一日付けのメッセー ついでチャー チルは翌二九日にまたしてもイー ジの中で私はスタ チャーチルは タイムリミットに切迫されてこ 「このような大戦争から リリ K デン

たがって手順は次のようにならなければならない。すなわち、

もし五日までにフィンランド政府から戦線離脱を行なう

論 る。この日になってチャーチルは「改めて」という語句に新たな解釈を加え、(G) 改めてこれを希望するなら』 我々はそれに従って宣戦を発するとの意向を伝えればよいのである。」 と主張したのであ 旨の回答をえないか、もしくは我々の通牒に対する反発的返答をえた場合に、その時点で我々はスターリンに『貴殿が 二五日に届けられたスターリン書簡中の

正式の宣戦要求を無視しようとしたのである。 二月一日に開催された第一二二回閣議の結論によれば、 チャーチルは一一月二九日付けのイーデン宛てメモランダ

たものであるとは信じない。」とつけ加えている。(gi 送り、 させられた」。 基づいて行動する以外に選択肢をみいだしえないが、依然私はこのような措置が我々の利益はおろかソ連の利益に叶っ 害することはイーデンにとって自明に思われたであろう。さて同日の閣議の最後に、チャーチルは「このような方針に てきた。このよりなイギリス政府の対応がスターリンの対英不信をさらに増大させ、イーデンの訪ソの成功を著しく阻 上、イーデンがモスクワに到着する一二月初旬の時点に到ってもイギリスの宣戦が行なわれていない可能性は十分にで 我々は待つべきである。」と主張したことを思い起すならば明らかであろう。 を主張した際に、 に基づいていたのは、一一月二四日の第一一六回閣議にてイーデンが三ヶ国の防共協定参加の情報をたてに即座の宣戦 にフィンランド政府から彼らの最後通牒に対する返答をえることができなかった場合に再びスターリンにメッセージを ムで彼が主張した手順に従って宣戦を行なうことを他の閣僚に呑ませている。 (6) 宣戦要求を「改めて」行なうかいなかを質すことになったのである。これが「改めて」という語句の新たな解釈 他ならぬチャーチルが 「二一日付の私の書簡への返書にてスターリンが正式に宣戦を要求する まで イーデンは「チャーチルの独裁者的な振舞い」によって「うんざり このような形で閣議決定が行なわれた以 すなわちイギリス政府は一二月五日まで

一二月二日、

チャーチルはマンネルハイムから次のような返事をえた。「フィンランドが必要としている安全保障を

デン

書

1

ヴ 1

(Harvey, Oliver)

によ

れば、

その際

るチ

ャ Ţ

チ ル は

V

か

にも不承不

承

の態度を示した。

か

翌六日イギ

リス政府は同日午

前

時

にフィ

ついにチャー

チルは自らの定めた手順に従うことなく、

同

夜

時三〇分、

フィンランド政府からの否定的回答がもたらされた。(8)

我 充分御 をえた一二月五日深夜に至り、(68) の批 ŋ であります」。 る 官に命じた。「フィ るとのイーデンらの主張にもかかわらず、 全 確保できると判断される地点にまで我軍が前進する以前に現在の軍事作戦を停止するのは不可能であり、 うとしたことを記録に留めさせたか しみはありません。 々 あることを認識していたチャ のは遺憾であり、 に望めないことが の心を強く揺り動かし、 判にそなえ、 がソ連政 1 またソ連に対してもなんらの貢献をなすものではないという見解を私は 抱いている。 承 ギリス 知のことと考えております。 (府を満足させなければならなかったという点に求められるべきである」。 (s) の宣戦布告は十中八九回避しえないとの判断を形成させた。 この書簡はイギリ ンランド、 が明ら の決定が不合理なも しかし、 またこれによって貴殿が対フィンランド かである以上、 心情的には宣戦とは逆の方向へ彼を振り向かせた。 このような苦難の日々に親書をお送り下さった貴殿の御厚意に深く感謝致したく思う次第 ーチルは、 ンガ ス政府の最後通牒にフィンランド ったのであろう。 ij 祖国を守る目的の軍事行動によって我フィンランドが英国との紛争に巻き込まれ Ì, ので できるだけ早期に宣戦を発してソ連政 꿄. チャーチル あったこと、 ル 一二日三日開催の第一二三回 Ţ 7 = 極東における戦争の勃発と合衆国 アに対する戦争宣言は決 はこれを聞き入れようとはしなかった。 とくに彼個人は最後の最後までこの措置 戦争宣言を強いられるならば、 政府がい 閣 しかし同時にマ かなる回答を与えるかを明確 |議において次の言葉を記録に残すよう書記 このため、 してイ 府の対英不満、 ギリ チ の参戦とが + フ ンネルハ スの利益にそったもの 1 宣戦布告の 私にとってこれほど深 ィンランド チ だが引き延ばしに 不信を和らげるべ ル は後世 イム 確実である旨 に ブ 唯 書簡 の K の 戦 1 の 予示し 歴史家 線離脱 は 牛 正当化 を チ で きで カ 7 け か は が 完 悲 Ì 6 お チ tc

宣戦布告に同意を与えた。

ランド、

ハンガリー、

か らの否定的回答をえ、 (2) ついに一二月七日イギリスの宣戦布告は行なわれた。

ルーマニアに対する戦争宣言を行なう旨を公けに発表し、

さらに同六日ハンガリー、

ルー

マニア

問題の解決を見た。しかし、宣戦がフィンランドの対ソ侵略を停止させる見込は皆無であり、またソ連に対するイギリ の感謝を引きだすことはできなかった。 イギリス側が、チャーチルの言うように、 ス の同盟精神を象徴する戦争宣言がソ連市民や赤軍兵士の抗戦士気を高揚させる役割を期待することもできなかった。 イーデンはソ連に向けてイギリスを出発する直前に、一九四一年後半の英ソ関係を緊張に導いた対フィンランド宣戦 ただソ連を満足させるために宣戦を行なったにせよ、いまやソ連政府側から

フィンランド宣戦問題をめぐる英ソ交渉は、一定の援助を与えつつもなんらの感謝を引きだすことができなかったばか なったのです。」と述べた。 を発しはしたが」と自らとりなした。イーデンはすかさず「そうです。我々はあなたがたを満足させるためにこれを行 第二回会合にて、ソ連の東欧各地における領土要求に即座の承認を与えようとしなかったイーデンに立腹するあまり、 ンランドを援助する計画を練っていたではないか。」と非難し、次いで「ところでイギリスはいまやフィンランドに宣戦 スターリンが「あの当時 「その通りである。 二月一六日から五回にわたって開催された英ソのモスクワ会議で、 そのことは理解している。だが、いまやそのことはどうでもいい。」と答えたのである。 (一九三九年夏から一九四○年冬にかけて)イギリス政府とフランス政府は、 しかし、 イーデンはスターリンからの感謝を引きだすことはできなかった。 宣戦問題はただ一度だけ触れられた。 ソ連と戦らフィ スターリンは、 まさに対 一七日の

だ、彼自身歴史家でもあったチャーチルは自らの行動の歴史評価をすでに下しているように思われる。この時期を扱っ 果をもたらしたのである。 チャーチルの行動は 「決してイギリスの利益にそったものでは」 なかったと言えよう。 ギリスの対ソ同盟精神、に対するソ連側の不信を高め、ひいては以後の英ソ交渉におけるイギリス側の立場を弱める結 史の示すように、 のである。 た彼の『第二次大戦回顧録』の第三巻は自らの発言の記録を求めたあの第一二三回閣議の議事録について沈黙している チルの行動は、「ナチス世界と戦う者ならびに国家は我々の援助を受けよう」 との「敵の敵は味方」方針、すなわちイ わたって宣戦を引き延ばしたチャーチルの行動の評価をここで控えるならば、それは礼を失することになろう。後の歴 「ヒトラーと歩む者ならびに国家は我々の敵と見なされよう」との「敵の味方は敵」方針の実行を引き延ばしたチャー チャーチルが自らの発言の後世への記録を求めた第一二三回閣議の議事録を目にした歴史家の一人として、数ケ月に ソ連は勝利国として第二次大戦の終結を迎えたのであり、 ソ連の敗北という 誤った予測に 基づいて た

りか、

ソ連の対英不信と不満とを増大させるのみであった独ソ開戦後半年間における英ソ関係全般を象徴していた。

2 Churchill, Winston, Second World War, vol. III, 331-333. New York Times, 23/6/41. 百瀬宏「第二次大戦中のソ連のフィンランド政策---戦後への展望に寄せて----」、『スラブ研究』二〇巻 (一九七五)、九八-九九。

История дипломатий, том IV, Москва 1975, 188. История второй мировой войны том IV, Москва 1974, 218.

- Ministry of Foreign Affairs of the U.S.S.R. Soviet Correspondence Relating to World War II, vol. II, Salisbury
- (い) Foreign Relations of United States (以下 FRUS と略称), 1941, vol. I, 56.

- 器 (©) FO 371/29302, N 6717/201/51.
 - (►) FO 371/29489, N 4840/78/38.
 - (∞) Churchill, The Second World War, vol. III, London 1950, 407-408.
 - (5) Maisky, Ivan, Memoirs of a Soviet Ambassador, The War 1939-1943, London 1967, 188.
 - (2) FO 371/29490, N 5096/78/38.
 - (\(\mathref{\pi}\)) Churchill, Second World War, vol. III, 408.

 - (2) CAB 66/18, WP (41) 219, 13/9/41.
 - (型) CAB 65/19, WM (41) 93, 15/9/41.
 - (\(\to\)\) FO 371/29490, N 5421/78/38.
 - (9) FO 371/29490, N 5501/78/38.
 - (\(\sigma\)) CAB 70/3, DO (S) 126, 4/10/41.
 - (2) CAB 66/19, WP (41) 272, 15/11/41. FO 371/29470, N 6312/3/38.
 - (2) CAB 65/19, WM (41) 103, 16/10/41.
 - (S) FO 371/29492, N 6060/3/38.
 - (云) CAB 65/19, WM (41) 104, 20/10/41.
 - (S) FO 371/29492, N 6125/3/38.
 - (X) CAB 66/19, WP (41) 245, 23/10/41.
 - (3) CAB 65/19, WM (41) 105, 23/10/41.
 - (영) FO 371/29469, N 6228/3/38.
 - (%) CAB 65/19, WM (41) 106, 27/10/41.
 - (5) FO 371/29470, N 6288/3/38.
 - (\(\circ\)) FRUS, 1941, vol. I, 83-84.

- (S) FRUS, 1941, vol. I, 85.
- (S) FRUS, 1941, vol. I, 86.
- (云) FO 371/29470, N 6385/3/38.
- (S) Daily Mail, Daily Telegraph, Manchester Guardians, 1/11/41. London Times, 3/11/41.
- (\(\mathbb{Q}\)) FO 371/29361, N 6490/201/56.
- (素) FO 371/29354, N 6369/185/56.
- (A) FO 371/29580, N 6373/78/38.
- (2) FO 371/29470, N 6374/3/38.
- (云) FO 371/29580, N 6373/78/38,
- (2) BBK/D 95, 6/11/41, Pika to Beneš. FO 371/29493, N 6468/78/38.
- (2) WO 193/694, 7/11/41. FO 371/29580, N 6473/78/38.
- (\$\mathbb{G}\$) FO 371/29581, N 6546/3/38.
- (#) FO 371/29475, N 6586/3/38.
- (\$\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\tinit}}\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\te}\tint{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\tinit}\\ \text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{\text{\text{\text{\text{\text{\texi}\text{\text{\texi}\text{\text{
- (\$\Pi\$) CAB 65/24, WM (41) 111, 11/11/41.
- (\$\Pi) Harvey, John (ed.), The War Diaries of Oliver Harvey 1941-1945, London 1978, 64.
- (2) FO 371/29354, N 6772/185/56. Dilks, David (ed.), The Diaries of Sir Alexander Cadogan, London 1971, 413.
- (\$\mathbb{G}\$) FO 371/29354, N 6783/185/56.
- (\(\sigma\)) FO 371/29477, N 6704/3/38.
- (♥) FO 371/29472, N 6799/3/38.
- (2) CAB 66/20, WP (41) 288, 26/11/41.
- (S) Addison, Paul, The Road to 1945, London 1977, 200. Harvey, War Diaries, 68. Young, Kenneth, The Diaries of Sir Robert Bruce Lockhart, vol. III, London 1981, 130. Carlton, David, Anthony Eden, A Biography, London 1981, 187.

- 温 (G) CAB 65/24, WM (41) 116, 24/11/41.
 - (2) FO 371/29472, N 6888/3/38.
 - (E) FRUS, 1941, vol. I, 108.
 - (含) FRUS, 1941, vol. I, 109.
 - (12) CAB 65/24, WM (41) 120, 27/11/41.
 - (2) Churchill, Second World War, vol. III, 473.
 - (5) Churchill, Second World War, vol. III, 474.
 - (S) FRUS, 1941, vol. I, 109n.
 - (3) Dilks, Diaries, 414.
 - (8) Churchill, Second World War, vol. III, 473-74.
 - (G) CAB 65/24, WM (41) 122, 1/12/41.
 - (S) CAB 65/24, WM (41) 122, 1/12/41.
 - (智) Harvey, War Diaries, 68.
 - (2) Churchill, Second World War, vol. III, 474.
 - (13) CAB 65/24, WM (41) 123, 3/12/41.
 - (吳) Douglas, Roy, New Alliances 1940-41, London 1982, 109 物医°
 - (S) Dilks, Diaries, 416.
 - (\(\colon \)) Carlton, Anthony Eden, 187.
 - (2) Kowalski, Włodzimierz, Wielka Koalicja 1941-1945, tom I, Warszawa 1973, 107.
 - (R) FO 371/26620, C 13476/949/21. FO 371/29995, R 10352/80/37. FO 371/29995, R 10510/ 80/37.
 - (尺) CAB 66/20, WP (42) 8.

・ギリスの対フィンランド宣戦問題(1941年)

未公開資料の略号について

② 勾內飾器 (Public Record Office, Surry, England)

FO 371 Foreign Office General Correspondence (political)

CAB 65 WM (War Meeting) minutes.

CAB 66 WP (War Print) memorandum.

WO 193 War Office, Director of Military Operation and Intelligence.

图 出版版本題 (House of Lords Records Office, London)

BBK Beaverbrook paper.

≪Summaries of Contents≫

British Declaration of War on Finland (1941)

— The First Touchstone of Anglo-Soviet Alliance —

Yutaka AKINO*

On the 22nd of June 1941, the first day of German attack on the Soviet Union, Churchill declared that Great Britain would give all-out assistance to the USSR on the principle that enemy's enemy is ally. In the declaration he also put forward another principle that enemy's ally is enemy. The declaration served as a major war propaganda, the content of which, however, did not actually reflect the real British war policy behind it.

The first principle soon led to a sort of alliance between London and Moscow, but Britain's attitude to Russia was not wholehearted. This caused Kremlin to be suspicious of British intention vis-à-vis the USSR. September Stalin requested the British Government to declare war on Finland, which since a few days later German launched their attack on Soviet Russia had become Hitler's co-belligerent in the struggle against the USSR but not against Britain. According to the second principle of Churchill Finland was to be Britain's enemy, consequently she should be declared so in the eyes of Stalin. Meanwhile the British Government did not want to face Finland fully involved in the Axis side by their war declaration on her. Without the USSR; enemy's enemy, Great Britain would have had nothing to do with Finland; enemy's ally. More important, the collapse of their new ally appeared to London very likely to occur at any moment. Therefore the British Government were rather reluctant to meet the Soviet demand for the declaration of war on Finland. This added fuel to Soviet's suspicion of Britain.

Towards the end of 1941 Red Army started their successful counterattack on Nazi-Germany with the help of Generals "Distance" and "Winter" and with a little help from England. Now the British Government had to deal with the Soviet Union, which showed their competence to survive German attack and to appear as a predominant European power after the war. The first thing for London to do was to somehow relieve the Russian

^{*}Assistant, Faculty of Law, Hokkaido University

suspicion and to establish the genuine Anglo-Russian coalition. But Churchill himself blocked the British war declaration on Finland for a certain period time which could have showed their singlemindedness about the alliance with the USSR, if it had been done enough promptly. And when British war was finally declared on Finland, on the 7th of December, it became too late for Churchill to please his Russian counterpart.

Implementation of the second principle, the war declaration on Finland was the touchstone of how much sincerity was in Churchill's first principle, British alliance policy towards the USSR, especially when Britain was not able to help the USSR, substantially; and the negative result of which lay embedded in Kremlin's memory not only during the war but also after it.